



## 可能性の宝庫 「絵引」

窪田 涼子（神奈川大学日本常民文化研究所・職員）

1963年10月、渋澤敬三は亡くなる6日前、長男・雅英へ葬儀の手配などを遺言するなかで「絵引と富永さんの魚体図譜はゼヒ君が出版してくれ」と言ったという。敬三にとって「絵引」は、長い間暖め続けた末にやっとその姿が見え始めてきた大切な夢の結晶であった。しかし、敬三は「絵引」の誕生した姿をついに見ることはできなかった。『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻は、敬三の死の一年後、64年12月に角川書店から刊行が開始されたのである。

神奈川大学日本常民文化研究所は、82年に財団法人日本常民文化研究所からのさまざまな有形無形の財産を継承して発足したが、その最初の大きな仕事は『絵巻物による日本常民生活絵引』の再版事業であった。この事業の経緯などについては当時編集委員のひとりであった西和夫氏（神奈川大学工学部教授）の研究会報告に譲り、本稿では、研究所に所蔵されている1000点近くの「絵引」画稿整理を行うなかで知り得た編纂のいきさつなどについて簡単に報告したい。

財団法人日本常民文化研究所の前身は、周知の通り、渋澤敬三が学生時代の仲間達と物置の屋根裏部屋に標本類を展示して始めた“博物館ごっこ”に端を発するアチックミュージアムである。敬三は21年、東京帝国大学を卒業し横浜正金銀行に入行、「日本資本主義の父」と称された祖父・渋澤栄一の嫡孫として銀行家の道を歩み始めたが、一方で幼少時からの夢であった学問の道も捨てることができなかった。その夢をかたちにしたものがアチックミュージアム（以下アチックと略す）であった。アチックはその後も仲間（同人）を増やし、当初は郷土玩具を、ついでさまざまな生活・生産の道具・民具を蒐集し、テーマを設定した共同研究を行う本格的な研究所として、33年頃から次第に体裁を整えていく。敬三は銀行勤務に支障のない休日を利用して同人等と共に日本各地を旅し、庶民の暮らしに視点を当てた写真、16ミリ映像を撮影した。また当時顧みられることの少なかった所謂じかたもんじょ地方文書に注目し、数多くの史料翻刻を出版した。民具などの物質資料だけでなく文献からも庶民の生活を知ろうとしたのである。アチックでは42年ごろまでに約100

冊もの資料集を刊行する。このような活動をおこなうなかで、敬三の「絵引」は発想されたのである。

「絵引」とは、平安～中世に成立した絵巻物の、主題の背景として描かれている当時の様々な民俗事象を模写の方法で「抜描き」し、その一つずつに番号を付し、名称を与え、索引をつけ、字引のように引けるようにするというものである。敬三はそこから、民具を研究する中で不明なものの回答を得、また庶民の暮らしの歴史の変遷を知ろうとしたのである。

34、5年頃アチックにおいて行われていた草履の一種あしなか「足半」の共同研究のなかで、同人の宮本馨太郎は、風俗史研究者の父・勢助の示唆を受けて絵巻物に描かれた足半を「足半絵画一覧表」にまとめ「足半草履の史的考察」として検討した。また同じ時期、敬三と馨太郎は、同道して歌舞伎小道具師・藤浪家に赴き、藤浪家が家業の小道具製作の参考資料として伝えてきた、小道具・調度類を古い絵画から抜描して編纂した数本の巻物を実見した。これらのことが敬三の「絵引」発想のきっかけではなかったかと考えられている。

先述したように「絵引」が実際に刊行物となったのは64年であるが、その編纂事業はそれを20年以上遡った1940年の「絵巻物研究会」の発足に始まっている。月1回、宮本勢助の架蔵する複製絵巻物を利用して絵巻物ごとに同人で検討、画家で民俗学者の橋浦泰雄が抜描模写を担当した。この時期『石山寺縁起』『絵師草紙』などの四つほどがまとまっており順調に成果が挙がっていたようである。現在、神奈川大学日本常民文化研究所に保管されている「絵引」画稿のうち、100点余りはこの橋浦泰雄の手になるものである。しかしながら戦争激化による「絵巻物研究会」の中断や空襲による大部分の画稿焼失があり、この「絵引」編纂事業は中断を余儀なくされたのである。

45年10月、敬三は幣原内閣の大蔵大臣となり戦後の混乱した金融の建直しを担ったが、46年5月には辞任する。その直後から公職追放となり渋澤財閥も解体されるが、51年の追放解除後から、敬三は財界の要人として数々の要職を歴任するようになる。このような敬三自身の立場や周辺状況の大きな変化のなかで、戦前のアチック時代

のように仲間達と研究に没頭することは困難となっていたが、それだけに戦時中に中断したままの「絵引」編纂への情熱はますます募っていったようで、54年3月に記された「絵引は作れぬものか」という文章で「いちいち絵巻物を繰りひろげて遡らないでも用を便ずる絵引があったらと今でも思っている」とその思いを綴っている。

そして55年12月25日に、再度「絵引」編纂にむけて「絵巻の会」の第一回会合がひらかれる。その後毎月最終日曜日に洪澤邸で開催され、敬三、櫻田勝徳、宮本馨太郎、笹村草家人、宮本常一、有賀喜左衛門、遠藤武、河岡武春等が参加した。抜描模写は橋浦にかえて日本画家の村田泥牛に依頼することとし、洪澤家架蔵の模本を利用して研究会で抜描箇所を決定し次回までに村田が抜描模写を行った。それを検討した上で青焼きにし、事物の類別、番号付、名称決定などを行い、宮本常一が解説のたたき台を作成し研究会で検討し、編纂事業は進んでいった。編纂過程では多くの困難が生じたが、最終的には敬三の判断により進められた。多忙な公務の中、晩年の敬三はこの事業にもっとも情熱を傾けていたという。

敬三の死後、64年に刊行が開始された角川版はそもそも独立した刊行物ではなく、角川書店が刊行を始めた『絵巻物全集』の付録というかたちで出版された。当時の角川書店社長・角川源義は、56、7年頃から角川書店の顧問のひとりに敬三を依頼し、敬三は『絵巻物全集』などの企画をわがことのように喜んでいたという。この『絵巻物全集』の刊行と、戦前から準備をすすめていた敬三の「絵引」構想が合致して、このようなかたちでの刊行につ

ながったものと思われる。

「絵引」は敬三が長年にわたってこだわり続け完成したもので、現在もそのユニークな発想、方法は有効である。特徴のひとつは絵巻物それぞれのストーリーを無視し、描かれたものを「事物」という要素に分解してしまったところにある。分解された要素は、別の視点、別の方法で再構築され得る可能性をもつ。日本農学会賞を受けた『豆州内浦漁民史料』の公刊に際して「論文を書くのではない、資料を学界に提供するのである」と敬三は述べたが、常に多くの人たちと多くの可能性を分かち合いたいと願う敬三の姿勢が「絵引」にも貫かれている。こ



角川書店版『絵巻物による日本常民生活絵引』4（1966年刊）より「540 いただく・かつぐ・だく」。絵巻物『絵師草紙』から、三種類の物の運び方をする人物を抜描きし、それぞれの着物、履物、持ち物などの名称を付している

れから「絵引」を基礎にさまざまな研究が展開されるであろうが、この敬三の姿勢だけは常に意識して継承していきたいと考えている。

## 参考文献

- アチックミュージアム『所謂足半に就いて』（1936年、のち『日本常民生活資料叢書』第1巻（三一書房、1972年）  
 有賀喜左衛門「絵引によせて」『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻（角川書店、1964年）  
 角川源義「あとがき」『絵引』第1巻（角川書店、1964年）  
 河岡武春「絵巻の会のこと」『新版絵巻物による日本常民生活絵引』総索引（平凡社、1982年）  
 窪田涼子「『絵引』成立過程についての一考察（1）」『歴史と民俗』16（平凡社、2000年）  
 窪田涼子「絵巻物から辞書をつくる」『屋根裏の博物館 実業家洪澤敬三が育てた民の学問』（横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編、2002年）  
 洪澤敬三「所感 昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一次大会にて」『祭魚洞襍考』（1941年、のち『洪澤敬三著作集』第1巻所収）  
 洪澤敬三「絵引は作れぬものか」『犬歩当棒録』（1954年、のち『著作集』第3巻所収）  
 洪澤敬三「序」『豆州内浦漁民史料』（1937年、のち『著作集』第1巻所収）  
 洪澤雅英「序」『絵引』第1巻（角川書店、1964年）  
 宮本馨太郎「第1巻民具篇解説」『日本常民生活資料叢書』第1巻（三一書房、1972年）